かわいいおきゃくさん

長沢小・3　今泉　凛々

おと年、はじめておきゃくさんが来た。でも家の周りをとびまわるだけだった。

そして、きょ年の六月ごろ、またおきゃくさんが来た。わたしの家のかべに毎日毎日どろをはこんでくるツバメだ。大へんそうだなと見ていると、いつの間にか、すがかん成していた。いつたまごをうんだのか分からなかったけれど、ツバメがすにいる日がふえた。それから少しして、小さな顔が見えはじめた。

「あっ、生まれている。赤ちゃんだ。かわいいね。」

と、ママとよろこび合った。何羽いるのだろうとわくわくした。日がたつと、ひなもせい長して五羽いることが分かった。親がひなのフンをくわえてどこかへすてに行っている様子を見て、ツバメはきれいずきだなと思った。

ある日、すくすくと大きくなったひなたちがへびにおそわれた。気がついた時には三羽食べられてしまっていた。とてもショックだったけど、のこった二羽がたすかってほっとした。せめてこの二羽だけでもぶ事にす立ってほしいと思った。

数日後、すから出て羽をひろげてとぶれん習をしていたひなたちが上手にとんでいった。うれしかった。家の周りをとび回って、おれいでも言っているのかななんて思った。毎日ピーピーとうるさかったけれど、しずかになるとさみしいと思ったから、すをこわさずにそうじをしておいた。

そして、今年の四月、またツバメが帰って来てくれた。きょ年のすを少し直して、子育てをはじめた。今年は四羽、みんなぶ事にす立ってくれた。うれしかったけど、やっぱりなき声がうるさかった。それと、家のにわにふんがいっぱいだったのは、きょ年にはなかったことだ。これはよそう外のことで、来年のためにすをそのままにするか、こわしてしまうか、家ぞくで相だんした。

そんな中、またべつのツバメがやって来て新しいすを作りはじめた。

「さすがにげんかんはこまる。」

と言いながら、ママがどろをとっていたけれど、ツバメも負けずにどろをはこんでいた。それをくり返していたら、ツバメはあきらめた。ママの勝ちだ。でも、ツバメはちがうところにすを作りはじめた。そこは、空っぽになったすの近くだった。けっきょく、わたしたちは見守ることにした。

あっという間に出来たすには、五羽のひなが生まれていた。親からえさをもらうためにならぶひなたちはとてもかわいかった。何事もなくす立ってくれるといいなと思った。

朝早く、ツピーツピーとさわがしい鳴き声を聞いてパパがさけんだ。

「へびがいる。」

と。気がついたのが早くて、今回は一羽も食べられずにすんだみたいで本当によかった。
　次の日、ひなの一羽が落下していた。すにもどしてあげようとしたら、見事にとびさって行った。
「なんだ、とべるのか。」
とびっくりしけど安心した。それを見て、自分もとべるのかと思ったのか、ほかのひなたちもとびはじめた。でも、まだ早かったようで、三羽は下におちていた。大じょうぶかなと心ぱいになったけど、三羽の中の二羽はとぶことができた。さい後の一羽がなかなかとべず、次の日の朝、様子を見てみると少しはなれたところで雨の中、力つきていた。
「かわいそうに。何かしてあげられなかったのかな。」
とくやしくなった。
　来年、またべつのツバメが来ると思うけど、正直ふ安だ。へびが来ないようにくすりはまいてあるけれど、それでも二度もきけんな目にあっているし、かなしい思いはしたくない。すをこわすべきか今もまよっている。でも、やっぱりかわいいツバメが見たいから、すはそのままにしておくのだろうな。